

平成 29 年度ユネスコスクール年次報告書

1. 学校概要

学校名 立教女学院中学校・高等学校 (※正式名称を記載)

種 別 保育園・幼稚園 小学校 小中一貫^{※注1}

中学校 中高一貫^{※注2} 高等学校

教員養成大学 専修学校、各種学校

特別支援学校

その他 (例：小中高一貫)

※注1 義務教育学校を含む ※注2 中等教育学校を含む

所在地 〒168-8616

東京都杉並区久我山 4-29-60

E-mail jogakuin-chuukou@rikkyojogakuin.ac.jp

Website <http://hs.rikkyojogakuin.ac.jp/>

児童生徒数 男子 0 名 女子 1,144 名 合計 1,144 名

児童・生徒の年齢 12歳～18歳

2. 報告期間

平成 29 年 4 月～平成 30 年 3 月

※報告書提出時点～平成 30 年 3 月末までの活動は、予定 (見込み) として記載ください。

3. 活動内容

※記入にあたっては、末尾の留意事項も確認ください。

(1) 活動の概要 (800 字程度＋活動内容を表す写真数枚)

※チェック事項 1-1、2-1 に対応

本校は、「1. 他者に奉仕できる人間になる」、「2. 知的で品格のある人間になる」、「3. 自由と規律を重んじる人間になる」、「4. 世の中に流されない凜とした人間になる」、「5. 平和をつくり出し、発信する人間になる」を教育目標としている。ESD を世界平和実現のための重要な柱と捉え、ESD の実践を通して、広い視野で考え主体的に生きる力の育成を目標とした。

具体的には、キリスト教教育、平和学習、国際交流を柱に、①土曜集会プログラム、②長崎・沖縄への修学旅行、③ARE 学習、④平和提言集刊行、⑤海外への派遣・受け入れプログラム、⑥模擬国連活動を行った。

① 土曜集会プログラム

対象：中学校高等学校全生徒

実施回数：月に 1 回 (年に 10 回)

主な内容：

<中学校>

・医師 谷口俊一郎による講演「いのちを考える—科学と信仰の視点から—」

- ・「諸宗教に学ぶ」中1：聖ルカ国際病院礼拝堂訪問 中2：イスラム寺院モスク東京ジャーミー訪問 中3：臨済宗妙心寺派 藤原東演師の講演
 - ・詩人 谷川俊太郎氏による講演・朗読
 - ・片柳弘史神父による講演「マザー・テレサとの出会い・神から与えられた恵み」
- <高等学校>
- ・「声なき者の友」の輪・代表 神田英輔氏による講演
 - ・日本紛争予防センター理事長 瀬谷ルミ子氏による講演
 - ・絵本作家 葉祥明氏による講演

② 長崎・沖縄への修学旅行

- ・長崎修学旅行
対象：中学3年生全員
期間：5月9日～5月12日
内容：
平和公園、浦上天主堂、被ばく鳥居、原爆資料館などを訪ねながら、実際に原爆の恐怖を体験した「長崎証言の会」の方をお招きし、原爆が投下された当時の長崎の様子について話を伺った。
- ・沖縄修学旅行
対象：高校2年生全員
期間：11月13日～11月17日
内容：
真珠湾攻撃によって始まった太平洋戦争時に、日本の国土で唯一地上戦となり、多くの一般市民が犠牲となった沖縄の戦争跡を見学した。平和祈念公園、ひめゆり平和祈念資料館、糸数壕、チビチリガマなどを訪れ、沖縄戦の悲惨さを学んだ。

③ ARE (ASK・RESEARCH・EXPRESS) 学習

自らの問いを調べてまとめることにより自学自習能力を養うことを目的としている。中学1年生は、新聞を題材に調べ学習を行い、地域の課題について調査、分析した結果をレポートにまとめた。中学2年生は、長崎修学旅行の準備学習として、原子力爆弾についての調べ学習を行った。中学3年生は、「平和と人権」をテーマに、2年時に引き続き、原爆や戦争を生み出す社会について学習したほか、ハンセン病患者を隔離した歴史についても学び、一人一人が個人として尊重される社会のあり方について考えた。

④ 平和提言集刊行

「戦いのない時代にするために」という題のもと具体的な提言を募集し、9名の生徒から応募があった。この9編から5編を選考し、平和提言集の第6集として刊行した。

⑤ 海外への派遣・受け入れプログラム

- ・派遣プログラム①
派遣先：Queen Margaret College (ニュージーランド)
対象：中学3年生、高校1年生、高校2年生、計8名
期間：7月31日から8月13日
内容：現地生徒宅にホームステイをしながら、実際に行われている授業を体験したほか、アボリジニの文化にも触れた。

- ・派遣プログラム②
派遣先：St. Stephen's Episcopal School（アメリカ）
対象：高校1年生1名
期間：9月～次年度5月
内容：寮で生活しながら、現地生徒と同様に学校生活を送った。帰国後は、礼拝の時間や文化祭等の機会を捉えて経験を分かち合う予定である。
- ・派遣プログラム③
派遣先：St Margaret's College（ニュージーランド）
対象：高校1年生1名
期間：1月～次年度9月
内容：現地生徒宅にホームステイをしながら、現地生徒と同様に学校生活を送った。帰国後は、礼拝の時間や文化祭等の機会を捉えて経験を分かち合う予定である。
- ・派遣プログラム④
派遣先：Queen Margaret College（ニュージーランド）
対象：高校1年生2名
期間：1月～次年度9月
内容：寮で生活しながら、現地生徒と同様に学校生活を送った。帰国後は、礼拝の時間や文化祭等の機会を捉えて経験を分かち合う予定である。
- ・派遣プログラム⑤
派遣先：University of California Davis（アメリカ）
対象：高校1年生16名、高校2年生6名
期間：8月5日から8月15日
内容：カリフォルニア大学デービス校の研究者から、生命科学や環境科学の講義を受け、最先端の研究がどのように社会を変えていくのかを学んだ。
- ・受け入れプログラム①
派遣元：Trinity University of Asia High School（フィリピン）
人数：生徒1名、教員1名
期間：10月21日から10月31日
内容：留学生は、本校生徒宅にホームステイをして、学校生活や休日を共に過ごした。英語の授業や文化祭に参加したほか、昼休みには交流会を実施した。
- ・受け入れプログラム②
派遣元：St. Stephen's Episcopal School（アメリカ）
人数：1名
期間：約2週間（※10ヶ月間の予定だったが、留学生の都合により帰国）
内容：本校生徒宅にホームステイをして、学校生活や休日を共に過ごした。
- ・第4回高校生カンボジアスタディツアー（日本ユネスコ協会連盟主催）
高校2年生1名が選出され、8月5日～8月12日に実施された同ツアーに参加した。帰国後は、スクリーンを使って全校生徒を前に報告会を開いたほか、文化祭でも現地での経験を模造紙にまとめ発表した。

⑥ 模擬国連活動

生徒による国際交流グループ「SMIS(St. Margaret's International Society)」の活動の中で、年間を通じて模擬国連演習を行ったほか、第1回全国高校教育模擬国連大会、第11回全日本高校模擬国連大会、第4回玉川模擬国連会議といった外部大会にも参加し、世界の諸問題を解決するための意識・態度・能力を身に付けるよう努めた。

(2) 活動の詳細

① 活動内容

※チェック事項 1-2, 2-1 に対応

ア. 活動分野 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 環境	<input type="checkbox"/> 2. エネルギー	<input checked="" type="checkbox"/> 3. 防災	<input type="checkbox"/> 4. 生物多様性
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 気候変動	<input checked="" type="checkbox"/> 6. 国際理解、文化多様性	<input type="checkbox"/> 7. 地域の伝統文化、文化遺産	<input checked="" type="checkbox"/> 8. 人権・平和
<input type="checkbox"/> 9. 健康・福祉	<input type="checkbox"/> 10. 食育	<input checked="" type="checkbox"/> 11. 持続可能な生産と消費	<input checked="" type="checkbox"/> 12. 貧困
<input type="checkbox"/> 13. エコパーク	<input type="checkbox"/> 14. ジオパーク	<input checked="" type="checkbox"/> 15. グローバルシチズンシップ教育 (GCED)	
<input checked="" type="checkbox"/> 16. ジェンダー平等	<input type="checkbox"/> 17. その他()		

イ. 活動を通して育みたい資質や能力 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 批判的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 未来像を予測して計画を立てる力
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 多面的、総合的に考える力	<input checked="" type="checkbox"/> 4. コミュニケーションを行う力
<input checked="" type="checkbox"/> 5. 他者と協力する態度	<input checked="" type="checkbox"/> 6. つながりを尊重する態度
<input type="checkbox"/> 7. 進んで参加する態度	
<input type="checkbox"/> 8. その他(自由記入)	

ウ. 活動時間 (複数選択可)

<input checked="" type="checkbox"/> 1. 教科の時間	<input checked="" type="checkbox"/> 2. 総合的な学習の時間
<input checked="" type="checkbox"/> 3. 特別活動等	<input checked="" type="checkbox"/> 4. クラブ活動
<input type="checkbox"/> 5. その他(自由記述)	

エ. 使用した教材 (書籍、ウェブサイト、パンフレットなど具体名)

土曜集会ノート、修学旅行ファイル、ARE ファイル

- ② ユネスコスクールとしての活動を各校の教育課程（指導計画）にどのように位置付けているか。指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善に努めているか。（200～300字程度）

※チェック事項 1-2, 1-3 に対応

本校は上記教育目標に基づき、「広く世界に目を向け、平和をつくり出す者へと成長する」ための様々な自学自習プログラム、国際プログラムを実施している。ユネスコスクールとしての活動は、こうしたプログラムの中核に位置するものと考え、プログラム実施の際には、世界の諸問題を題材とした講演や映画を積極的に取り入れるよう工夫している。

- ③ 学校全体で組織的かつ継続的に活動に取り組める体制や環境をつくるため、どのような取組を行っているか。（200字程度）

※チェック事項 1-4 に対応

国際部署内に、国際的な視野・態度の育成を目的としたプログラムを扱う国際教育委員会を設置し、月に1度会合を開き、各種プログラムの実施状況について確認している。また、ユネスコスクールとしての活動は、この委員会を中心に展開し、学校通信などの印刷物やホームページを活用して、その成果を校内外へ発信している。

- ④ ユネスコスクールとしての活動の質の向上のための学校活動の評価（内部/外部）の方法・具体的内容と、それによって明らかになった成果と課題。（200字程度）

※チェック事項 1-5 に対応

今年度は実施しませんでした。

- ⑤ ESD の推進拠点としての活動成果の発信方法・内容と、発信により得られた効果。(200字程度) ※チェック事項 2-2 に対応

今年度は実施しませんでした。

- ⑥ 学校以外の団体との協働・交流・ネットワーク形成(地域コミュニティ、大学、ESD活動支援センター、ESDコンソーシアムとの連携など)
(200字程度) ※チェック事項 2-3 に対応

株式会社資生堂を連携して、「He for She すべての人が輝く社会を目指して、Generation Zからの提言」というテーマでプロジェクトを実施し、UN Women と資生堂が国連大学で共催したシンポジウムで、ジェンダー問題解決のための提言を発表した。

- ⑦ 国内外のユネスコスクールとの交流・ネットワーク形成(200字程度) ※チェック事項 2-4 に対応

今年度は実施しませんでした。

- ⑧ ユネスコスクールの活動による効果について、特筆すべき（特に強調したい）内容（例えば児童生徒、教員、カリキュラム・教授法、学校経営、地域・保護者との関係など様々な面でのポジティブな変化）（200字程度）
※チェック事項 2-5 に対応

第4回高校生カンボジアスタディツアーに高校2年生1名が選出され、8月5日～8月12日に実施された同ツアーに参加した。帰国後、全校生徒を対象に「カンボジアにおける持続可能な支援の形」について報告をしたところ、多くの生徒がこの発表に感銘を受け、特にアジアの発展途上国の支援に関心を持つ生徒が増えた。その結果、「ユネスコ世界寺子屋運動」に書き損じハガキを寄付する活動では、357枚ものハガキを全校生徒から集めることができた。

- (3) 平成30年度の活動計画（200～400字程度）

キリスト教を基盤とする学校として、土曜集会や礼拝を通して、平和を愛する心を育み、平和をつくり出し発信できる者へと成長するための活動を継続させていく。また海外の姉妹校（アメリカ1校、ニュージーランド2校、フィリピン1校）ともさらに交流を深め、広く世界に目を向け、世界的な視野に立って諸問題の解決にあたる意識・態度・能力を育むことを今後も目指す。具体的には、模擬国連活動を活発化させたり、ARE学習をさらに充実させたりすることで、自分の力で課題を発見しそれを解決する力を養う様々なプログラムを実施していきたいと考えている。